

都内某所、広大な敷地を誇る私立大学。そのキャンパスの最奥に位置する、現在は使われていない旧体育館の地下。かつては重量挙げ部などが使用していたというその殺風景なコンクリート剥き出しの空間は、今やサッカー部の一部関係者のみが立ち入ることを許される「特別トレーニングルーム」と化していた。

「はあっ……! はあっ……、はあっ……!」

重苦しく湿った地下の空気を切り裂くように、荒々しい呼吸音が響き渡る。サッカー部において絶対的なエースストライカーとして君臨する結城湊（ゆうきみなと・22歳）は、汗で全身を濡らしながら、床に両手をついて激しく肩を上下させていた。しなやかでありながら無駄のない筋肉。アイドル顔負けの端正な顔立ち。そして、ピッチ上で見せる誰よりもアグレッシブで華麗なプレースタイル。湊は大学内はおろか、プロのスカウトからも熱視線を送られるほどの逸材だった。女人禁制の厳しい寮生活においても、彼の周りには常に彼を慕う後輩や、羨望の眼差しを向ける同級生たちが絶えない。

しかし、そんな完璧な男である湊には、誰にも、家族にすら相談できない「恐ろしい秘密」があった。

（なんで……今日のメニューは、こんなに異常なんだ……っ。下半身ばかり、酷使するよ
うな……っ）

湊が心の中で毒づきながら、自分の股間周辺に走る違和感に顔をしかめたその時だった。

「どうした結城。もう限界か？ 地区予選突破の要であるお前が、その程度のスタミナでは困るな」

ドスンドスンと重い足音を立てて近づいてきたのは、サッカー部監督の如月力（きさらぎりき・22歳）だった。五十代とは思えない、まるで丸太のような太い腕と胸板。現役時代は「重戦車」と呼ばれたその屈強な肉体は、威圧感の塊だった。

「い、いえ……監督。少し、息が上がっただけで……」

「無理をするなよ、湊。お前は俺たちの大事な『宝』なんだからな」

如月の背後から、甘く、どこか粘り気のある声が降ってきた。先輩であり、現在は万年補欠に甘んじている桐生蓮（きりゆうれん・24歳）だ。長身でモデルのように整った顔立ちをしているが、その細められた瞳の奥には、獲物をねぶるような底知れない爬虫類のような冷たさが宿っている。湊は昔から、この桐生という先輩のことが少し苦手だった。

いつも優しく接してくれるが、時折見せる執着に満ちた視線が、湊の背筋を凍らせるのだ。

「桐生先輩……。でも、もうすぐ予選ですし、俺がもっとやらないと」

「ふふつ、真面目だなあ。でもね、俺たちは気づいてしまったんだよ。湊のポテンシャルが、どうしてあと一歩、突き抜けないのかをね」「え……?」

桐生の言葉に、湊は首を傾げた。その瞬間、部屋の隅の暗がりから、白衣を着た小柄な老人が姿を現した。スポーツ科学基礎研究教員の頑村了見（がんむらりょうけん・64歳）。IQ189という常人離れた頭脳を持ち、大学のスポーツ医学において数々の特許を持つマッドサイエンティストだ。

「ヒッヒッヒ……。結城くん、君の身体の構造は、実に、実に興味深い。医学の常識を覆す、まさに奇跡の突然変異だ」

「頑村、教授……。? なんの、話を……」

「とぼけなくていい。我々はもう、君の『すべて』を知っているのだよ」

頑村は手元のタブレット端末を操作し、壁に設置されたモニターに映像を映し出した。

「なっ……!?!?」

モニターに映し出された映像を見て、湊の心臓が早鐘のように打ち始めた。顔から一気に血の気が引き、指先がガタガタと震え出す。それは、部室のシャワールームや、湊の個室での着替えの様子を盗撮した映像だった。ただの盗撮ではない。映像は不自然なほど、湊の「下半身」を執拗にズームアップしていた。

「あ、ああ……。っ、消せっ！ 消してください!!」

「見事なものだろう? 男の象徴のすぐ裏側に、隠されるようにして存在する、もう一つの器官。未発達でありながら、完全な構造を保った『女性器』。君は原因不明の【カントボーイ】なのだよ、結城くん」

頑村の言葉が、死刑宣告のように地下室に響き渡った。湊の最大の秘密。男として生まれ、男として生きてきた彼の下半身には、薄桃色の秘裂を持つ女の証が備わっていた。誰にも見られないよう、風呂も着替えも常に一人で隠れて行い、絶対にバレないように必死に隠してきた。それが今、この三人の男たちに完全に暴かれていたのだ。

「なんで……。なんで、こんなこと……。っ!」

「ロッカールームに超小型カメラを仕掛けたんだよ。俺さ、ずっと湊のことが好きだったんだ。お前の綺麗な顔、しなやかな筋肉……。でもまさか、こんなに『美味しそうな穴』まで隠し持ってるなんて、想像以上だったよ」

桐生が、恐怖で後ずさる湊の肩を優しく抱き寄せた。逃げようとする湊だったが、背後から如月監督の丸太のような腕が伸び、湊の身体をがっちりと拘束した。

「はなせっ！ 監督、離してくださいっ！！」

「暴れるな結城！ 俺たちはな、お前を脅そうというんじゃない。これは地区予選を突破するための、純粋な『科学的トレーニング』なんだ」

「ト、トレーニング……！？ こんなの、おかしいですよっ！」

「ヒッヒッヒ。少しもおかしくはない。君のその女性器は、現在まったく使われていないせいでホルモンバランスを崩している。この眠っている『牝の器官』を徹底的に開発し、女性ホルモンと快楽物質を脳内で爆発的に分泌させれば、君の運動能力、反射神経、動体視力は、今の数倍に跳ね上がるのだよ！」

頑村が狂気に満ちた瞳で唾を飛ばしながら熱弁する。

「嫌だ……やめろっ、俺は男だ！ そんな穴、開発なんか……っ」

「湊、怖いのか？ 大丈夫だよ、俺が優しくしてあげるから。お前はただ、俺たちにその可愛い牝穴を明け渡して、気持ちよくなるだけでいいんだ」

桐生は甘い声で囁きながら、拘束されて身動きが取れない湊のトレーニングパンツに手を掛けた。

「やめ……ひっ、やめろおっ！！」

ビリッ！！

容赦なくジャージが引き裂かれ、下着ごと床に叩き落とされる。ひんやりとした地下室の空気に、湊の秘密の場所が曝け出された。男の象徴は恐怖で縮こまっていたが、その裏側にある、まだ誰にも触れられたことのない純潔の秘裂が、男たちの粘り着くような視線に晒されていた。

「おお……生で見ると、さらに美しいな。まだ一度も使われていない、極上の処女穴だ」

如月が興奮で息を荒くしながら、湊の両脚を強引に掴み、M字に大きく開かせた。

「あ……ああ……っ、見ないで……見ないでくださいっ……」

羞恥心と恐怖で、湊の目からボロボロと涙がこぼれ落ちる。

「泣かないで、湊。ほら、せつかくの可愛いお顔が台無しだぞ？」

桐生はチュツと湊の涙を舐め取ると、ポケットから透明なジェルを取り出した。

「まずは、準備運動からだ。お前のここ、どんな感度してるのかな……？」

ヌチャ……。

冷たいジェルが、湊の秘裂の入り口に塗りたくられた。

「ひゃんっ！？ あ、や……つめ、たい……っ」

「教授、このカントボーイのクリトリス、普通の女より少し大きくて敏感そうですね」

「うむ。男性器の名残もあるのだろう。神経の密集度は通常の人間の比ではないはずだ。さあ桐生くん、たっぷりデータを取ってくれたまえ」

桐生の手袋越しにローションで濡らされた長い指が、湊の秘唇を優しく、しかし確実に押し開き、隠れていた真珠のようなクリトリスを的確に捉えた。

「あッ……！？ んっ、そこ……っ、だめっ……！！」

「どうした湊？ まだ指先で軽く触れただけだぜ？ こんなにビクビク震えて……可愛いなあ」

「ちがつ、これは……っ、くすぐったいだけで……っ」

「強がるなつて。俺の指が触れるたびに、ここ、どんどん硬く勃起してきてるぞ。ほら」

クチュツ……、クチュクチュ……ッ。

桐生の指先が、クリトリスの包皮を優しく剥き出しにし、最も敏感な粘膜の先端を指の腹でコロコロと転がすように愛撫し始めた。老獪なサイコパスである桐生の手つきは、まるで高級な楽器を奏でるように繊細で、しかし湊の理性を確実に削り取る計算し尽くされた動きだった。

「アッ……！！？ あ、ああッ！ ひんッ、や、やめ……っ！ 変な感じが……っ」

「変な感じじゃないよ。気持ちいいんだろ？ 湊は本当は、ここを触ってほしかったんだよな。ずっと隠してて、ウズウズしてたんだろ？」

「ちがい、ますっ……！ 俺は、おとこ……ああッ、ああッ……！」

桐生が指の動きを急激に早め、クリトリスを左右に弾き始めた。

「ヒッヒッヒ、脳波計の数値が跳ね上がっておる！ 未開発の快感神経が、一気にショートを起こしているぞ！」

「あゝッ、アゝッ、アゝッ！！ だめえッ、しびれるうッ！ せんばい、やめッ、とめてえッ！！」

湊の身体は如月に拘束されているため逃げることもできず、ただ与えられる強烈な快楽に全身をガクガクと痙攣させることしかできなかった。

「とめてほしいの？ でも湊の下口、俺の指を欲しがって、こんなにトロトロの蜜をこぼし始めてるぜ？ なんて淫らなカントボーイなんだ」

「あゝアゝッ！！ イゝッ、や、やだ、なにか、出るううッ！！」

「出しているよ、湊。俺の手の中で、思いつきイッていいからね」

「アゝーッ！！ イゝグウウッ！！！」

パチン、と湊の頭の中で何かが弾けた。男として生きてきた22年間で一度も経験したことのない、女性器からの圧倒的で暴力的な絶頂。湊は背中を大きく反らせ、白目を剥きながら、秘裂から透明な愛液を激しく噴き上げた。

ビクンッ、ビクンッ！と小刻みに震える湊の身体。口からはだらしなく唾液が垂れ、エースの面影はそこにはなかった。

「ふはっ、すごい潮だ。一回のクリ責めでここまでいくなんてな。……監督、教授。こいつの穴、最高ですよ」

桐生が、甘く狂った笑みを浮かべて振り返る。

「よし……準備運動は終わりだ。次は俺の番だな。その生意気な未開の穴を、俺の極太のペニスで雌豚の肉便器に拡張してやる」

如月監督がズボンのベルトに手を掛け、凶悪なまでの巨根を露わにした。

禁断のトレーニングという名の、終わりのない地獄の愛撫と凌辱が、今まさに本格的な幕を開けようとしていた。